
G線上のエリア——Area On G Strings

千住夏樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

G線上のアリア——Area On G Strings

【Nコード】

N9583K

【作者名】

千住夏樹

【あらすじ】

中東のアルジャジーラは、これが人類が体験するであろう最後の戦争の引き金になるのだと、暗に自由主義を標榜する国家に向かって何度も繰り返し警告を発していた。

眼下に鬱蒼とした森が拡がっていた。突き抜けるような真夏の青空が頭上高くそびえ、蝸の泣き声が時折そよ風に揺らぐカーテンの向こうから響いた。

まどろむ昼下がり、ゆっくりと流れてゆく時間、JBLからG線上のアリアが穏やかな空気に溶けるように室内を満たしていた。

100インチの無音のプロジェクターは、先ほどからアメリカがイラクの核施設を爆撃し、多数の死傷者が出たことを、繰り返し伝えていた。

中東のアルジャジーラは、これが人類が体験するであろう最後の戦争の引き金になるのだと、暗に自由主義を標榜する国家に向かって何度も繰り返し警告を発していた。

画面は先ほどから落ち着きなくまるで壊れた映写機のように世界の各地を映し出していた。イスラム原理主義国家は、同胞イラクが攻撃されたことによって聖戦を声高に叫び、嘆きの壁にはいつにもまして、多くの信者が頭を垂れ、祈りを捧げていた。

フランス・パンを契り、カマンベール・チーズを挿み、安っぽい口ゼでそれを流しこんだ。

・・・まさに人類は、G線上の綱渡りを放棄し、いよいよ滅亡への道を歩んでしまった。

もう取り返しがつかない・・・愚か者の最後は近い・・・苦笑するしかあるまい、この期に及んで・・・。

ブッシュは会見で、これが最善の策なのだと真っ赤に上気した顔で記者に向かってまくし立てていた。

まるで、人事のようにスクリーンはイラクの核施設を飛び交う劣化ウラン弾のすさまじい破壊の様を全世界に向けて流し続けている。

ベランダのカーテンが揺らいだ。

「・・・いるの？」

「ああ、皐月ちゃんか・・・学校帰りなの？」

「うん、クラブさぼっちゃった・・・」

蝸は相変わらず元気よく泣き声を上げ続けていた。真夏の熱気もこの空調の利いた部屋には届きそうもない。

「ステキな景色よね、私この時間ここから見る街の景色が一番好き・・・」

「僕もだよ、この夕暮れがほんの少し先にあつて、水平線がオレンジから紺碧になってゆく、その姿が唯一好きだよ・・・」

「片桐さんって、何の仕事してるの・・・いつも家にいるよね、会社に行かなくていいの？」

「ははは、言ってなかったっけか、長い付き合いっだていうのにね。僕の仕事はこの部屋の5台のパソコンだけで事足りるんだよ、極端に言えば家から一步も出なくてもなに不自由なく生活できるんだよ」

「・・・ヒッキーなの片桐さん」

「うん、まあ、ある意味ね・・・分別のある引きこもりってところかな」

「ふーん、不思議ね、それって・・・暑かったなあ、今日・・・何か飲み物もらっていい？」

「ああ、冷蔵庫にね、あるから好きにしていよいよ・・・」

皐月は、僕が、唯一親しくしている左隣の家の娘で確か私立の中学

の3年生だった。父親はかなり名の知れた画商で、母親は声楽家だった。

僕は何度かその画廊を訪れ、気にいった絵を何枚か買い、母親のコンサートにも通った。

出不精の僕を皐月の父は、根気よくホーム・パーティーに誘ってくれた。以来、なぜか、皐月とはよく話をする仲になった。僕にとっても、恐らく皐月にとっても15歳も歳が違うのに妙に馬が合うってのは不思議な関係だ。

「お腹は空いてない？」

「ちよつとね・・・」

「食べる？」

バケットにチーズを挿み、皐月に手渡した。

パンを口に頬張りながら皐月が流し目をくれた。

その眼はテーブルの上のワイングラスに注がれていた。

時折見せる皐月の大人びた表情に僕はいつも驚く、そして今もそうだ。

「すごくフルーティな香りがするわ・・・頂いていい？」

「安物だけだね・・・パパに怒られないかな？」

「時々ね、パパに付き合っただけたりしてるのよ、ママに内緒でね・・・お酒は駄目だけどね、ワインは身体にいいんですって・・・なんてってキリストが口に含んだものなんだからってね・・・ははは」

穏やかに、はにかんだ笑が室内に響いた。アリアはもう既に何度目かのリピートを繰り返していた。

「相変わらずすごい迫力ね、この影像・・・なんの映画？」

「映画じゃないよ、今、起こってることさ・・・人類の存亡を僕はパンを齧りながら観てるってわけ・・・」

「ふふん、現実かあ・・・」

皐月は真っ赤に熟す寸前の苺を、ワインと一緒に頬張っていた。時折、皐月のシャンプーの香りが、苺の甘酸っぱい香りと共に空調の流れの中に混じって鼻腔を擦った。

いつの間にか蝸の声も静まっていた。夕暮れの帳が訪れようとしていた。

煙草を吸おうと手を伸ばそうとした僕の腕に皐月の額があった。

画面を見つめる皐月の瞳は他人事のようにその生々しい光景を映し出していた。

いや、その１５歳の瞳は他人事なんかじゃないんだと訴えているようにも見えた。

「もう止められないの・・・片桐さん・・・」

「・・・そうだね、人類はやっぱり愚か者だったってことかな・・・」

画面に照らされた彼女の顔が泣いているようにも見えた。

夕暮れの気配はこの穏やかに過ぎてゆく部屋にも忍び寄っていた。

画面はNHKに変わり、首相の会見が始まっていた。

我が日本国は今回のアメリカのイラクへの爆撃を全面的に支持する旨を伝え、今こそ自由主義国家が団結してこの難局に当ることを声を荒げて訴えていた。

あの閃光の中で幾人の人々が犠牲になったのだろう。いま、繰り広げられているこれが現実なんだと、いったい、幾人の人間が気付いているのだろう、最終戦争の火蓋が今正に切られたのだと言うことを、開けてはならないパンドラの箱を人類が開けてしまったのだと言うことを・・・。

薄暗い夕闇が忍び寄る部屋の中で、真っ白な半袖のセーラー服が、
小刻みに震えていた。

<了>

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9583k/>

G線上のアリア——Area On G Strings

2010年10月15日18時08分発行